

最終講義

私は、あと2カ月余りで定年退職を迎えます。最後の授業に当たり、37年間の大学教員生活で考えてきたことの一部を皆さんにお話したいと思います。

1975年4月に名古屋大学教養部に英語教員として赴任しましたが、1994年に名古屋大学の外国語科目に韓国語が加わると同時に、韓国語教員に籍を移しました。したがって、英語教師として19年、韓国語教師として18年勤務したことになります。

その間多くのことを経験してきました。楽しいこともたくさんありましたし、辛いこともいろいろと経験しました。しかし、総合的に言えば、大変面白かったとすることができます。

私の特異な教師経歴で得られた最も意義深いことは、英語と英語以外の外国語の重要性をどちらも実感できたことです。皆さんは今英語と韓国語を習っているのだと思いますが、どちらの勉強に重点を置いていますか。人によって異なるでしょうが、英語の方が重要だから英語の方に重きを置いている人が多いのではないのでしょうか。しかし、両方の言語の教育に携わってきた者として、どちらの勉強も大事だ、意義があると言わざるを得ません。

英語は、よくご存じのように、世界共通語としての地位を確立しています。

地球的な規模での情報交換のほとんどが英語を媒体として行われています。国際的な商業活動も学術活動も英語によって行われています。皆さんは大学を卒業して国際社会の一線で中心的な役割を担うことになると思いますが、それには英語の知識と能力が必要です。基本的な英語能力はもはや皆さんにとって必須条件であると言っても過言ではありません。

しかし、いくら英語が重要であるからと言っても、それだけでは十分ではありません。英語さえ使うことができればよいという人が多いのですが、外国語教師としてそれは正しくないと言わざるを得ません。なぜなら、世界には数千もの言語が存在しているからです。その各々が独自の価値体系を備えています。私達は母語を覚えることで一つの価値観を身につけることになります。きちんとした価値観を身につけること自体重要なことですが、それだけでは国際的な視野を育むことはできません。自分の価値観を絶対化してしまい、他の価値観との葛藤を正しく回避することができないからです。それは、歴史が証明しているところです。外国語を習いその背景にある価値観を知ることは、自己の価値観を相対化させ、価値観の衝突から生じる問題の多くを解決するのに役立ちます。これが国際人となるための第一歩です。皆さんが中学校時代から習ってきた英語がその役割を果たしてきました。

しかしながら、真の国際的視野を養うためには価値観の相対化だけでは不十

分です。さらに一歩進んで多様な価値観があることを知らなければなりません。自分の価値観を相対化すべき相手は一つだけではありません。世界には様々な価値観が存在するのです。英語だけを習っておけばいいというような画一的な考え方がいかに危険なものであるか、よく考えていただきたいと思います。英語以外の外国語を学ぶことはそのような危険な画一的思考を防ぐための非常に有効な手段なのです。そのことを忘れないでいただきたいと思います。

ところで、皆さんが韓国語を選択した理由は何でしょうか。最近では、韓国のドラマや K ポップが好きで韓国語の勉強を始める人が多いようです。また、何となくという非常に消極的な理由で勉強する人も多いでしょう。私が韓国語の勉強を始めた頃にはそのような理由で勉強する人はほとんどありませんでした。つい 10 年ほど前まで韓国と言えば「近くて遠い国」と言われていました。ですから、韓国や北朝鮮に興味がある日本人は非常に少なく、韓国語を勉強する者は、一般の人にはわからない特殊な目的のためでしたから「代わり者」だとみなされていました。私も同じでした。私が韓国語の勉強を始めたと知ると、みな決まってどうしてかと聞いたものです。理由はもちろんあります。ただ、私の場合、理由は一つや二つではありませんでした。一度数えてみたら十幾つもありました。最初は、聞かれるたびにそれらの理由をいちいち話していたのですが、煩わしくてたまりませんでした。

それであるとき、少し意地悪にこのように言いました。「いいでしょう。理由が聞きたいなら教えましょう。でもその前に、あなたが韓国語を習わない理由を教えてください。隣の国の言葉なのに。」と言ってみました。すると、相手は答えられませんでした。実は、これは冗談ではなく、私が韓国語を勉強しようと考えた理由の一つだったのです。あるドイツ人の同僚が、私が韓国語の勉強をしているのを見て偉いと褒めてくれて、その後でこう言ったのです。「日本人は変だ。外国語と言うと西洋語しかないと思っているようだ。どうして周辺の国の言葉に関心がないのかわからない。」と。私も同じことを考えていましたので、大いに勇気づけられました。

私が韓国語を教えるようになった1990年代の半ばでも状況はあまり変わりませんでした。ですから、韓国語学科創立時のスローガンは「韓国語に市民権を」でした。それがかなうまでどれほどかかるのだろうか、定年退職するまでにそんな日が来るだろうかと思っていたら、今世紀に入るとすぐに事情が急変しました。ワールドカップ共同開催や韓流ブームで急激に韓国への関心が高まり、最近ではKポップ人気も拍車をかけています。いまや韓国語は押しも押されもしない第二外国語として市民権を獲得しています。韓国語を教師として喜ばしい限りです。

しかし、反面で、少々気になることもあります。韓国に対する興味が非常に

特殊なことに限られていることです。韓国の魅力はたくさんあるのにもかかわらずです。それに、これほど多くの人が同じことに関心を寄せているというのも、何か不自然な感じがします。韓国への興味はもっと多様化すべきだとも思います。韓国への入口は何であっても構いません。しかし、中に入ったら韓国をそれぞれ自分の目で見て、新しい発見をしてもらえればと思います。

私が韓国語と出会ったのは偶然のことでした。それは1981年のことです。当時、1988年に開催される第24回オリンピックの招致をめぐって名古屋とソウルがし烈な争いを繰り広げていました。そのとき、日本ではほとんどだれもが名古屋が招致に成功するものと予想していました。日本は経済大国としての発展の絶頂期にありまして、1964年に東京でオリンピックを開催したという実績もありました。一方、韓国も「漢江の奇跡」と呼ばれる高度経済発展を成し遂げてはいましたが、軍事政権下にあり政情が不安定なうえ、国際的イベントの実績がない、と少なくとも日本では考えられていたためでした。ところが、バーデンバーデンで開かれた国際オリンピック委員会の総会での投票の結果、ソウルが大逆転で招致することになりました。私は名古屋招致に反対の意見を持っていましたので、次の日の朝の授業でこの話をしました。「オリンピック開催地が名古屋でなくてよかった。世界のほとんどの国が開催したことがないのに、いくら経済力が付いたといっても、日本で二度開催する必要はない。オリンピ

ックが経済発展の効果をもたらすというのなら、開催されていない国に譲るべきだ」そのようなことを話しました。

その授業が終わると、一人の学生が私のところにやってきて言いました。「先生、ありがとうございました。」と言うのです。どうしてそう言うのかと尋ねると、その学生は、「私は韓国人留学生です。私達にとってソウルにオリンピックを招致することは国を挙げての念願でした。念願がかなったことを先生が祝福してくださって有り難くてたまりません。」と言いました。これには少し当惑しました。私はソウルを祝福したわけではなかったからです。実は、彼が韓国人であることも知りませんでした。学生の中に留学生がいることは知っていましたが、かれが中国人であるのか韓国人であるかもわかりませんでした。それに、彼は私が出会った初めての韓国人だったのです。彼が、韓国に関心があるかと聞くので、隣の国であるからもちろん関心はあると答えはしましたが、これはほとんど社交辞令でした。ソウルが韓国の首都であることぐらいは知っていましたが、韓国の地図でソウルがどこにあるかも知りませんでした。続いて、彼が韓国語を習ったことがあるかと聞くので、習ったことはないがいつか勉強してみたいと答えました。これは嘘ではありませんでした。当時私は音声学、音韻論を勉強していました。韓国語が音声学、音韻論的に興味ある言語であることは本で読んで知っていたので、いつか音声だけは勉強しなければならな

いと思っていたからです。留学生は、それならばぜひ紹介したい本があると言って、次の週の授業のときに一冊の本を持ってきてくれました。それが、講談社現代新書として出版された渡辺吉鎔氏の『朝鮮語のすすめ』でした。この本はやや古い本ですが名著ですから、皆さんも一度読んでみてください。

これが私の韓国語との出会いでした。この本を読み興味を持った私は、さっそく勉強を始めようと本屋に行ったのですが、本がありません。当時、普通の本屋には韓国語関係の本は全くありませんでした。大きな本屋へ行っても一冊あるかないかというような程度でした。今日、ちょっとした本屋行けば簡単に見つけられます。大きな書店なら何十冊も並んでいます。まさに選り取り見取りなのですが、かえって選ぶのに困るほどです。本当に隔世の感がします。

何とか学習書を一冊手に入れて勉強を始めたのですが、なかなかうまくいきません。ハングルが覚えられないのです。ハングルの構成する字母の数はたった24個なのですが、これがなかなか覚えられません。情けないこと限りがないのですが、覚えようとしては止め、しばらくしてまた挑戦しては放棄するということの繰り返しで、結局、なんとかハングルの覚えるまでに数年が過ぎていました。ハングルの覚えてしまったからは、面白いように勉強が進んだのですが、最初の段階で足踏みばかりしていたのです。

私はかつて韓国語を「温泉卵」に譬えたことがあります。温泉卵はご存知で

すね。白身と黄身の凝固温度が違うために 65 度前後の温泉で茹でると白身がやわらかいまま黄身だけ固まります。温泉卵は皮をむくのに注意が必要です。乱暴に扱うと中身が台無しになってしまいます。慎重に殻をむけば中は柔らかい白身です。日本語話者にとっての韓国語もこれと同じで最初の殻のむき方、つまりハングルを覚えることが難しいのです。ハングルさへ覚えてしまえばあとは簡単です。文法構造は日本語と同じですから、他の外国語を覚えるときのよな苦勞はありません。もちろん、活用形という少々固い君の部分がありますが、それだって大したことはありません。簡単に消化できます。

私は、殻のむき方がわからずにおいしい卵を味わうことができなかつたわけです。この経験が、あとで教科書を作るときにずいぶん役に立ちました。皆さんが使った教科書は、この経験を活かして、7、8 回程度の授業でハングルの基本が覚えられるようになっていきます。その気になれば 2、3 日で覚えられるほどやさしい手順になっています。皆さんはすでに韓国語という卵の殻をやぶっています。中身を十分に味わってみてください。

ハングルを覚えてしまつてからは、自分でも信じられないほど勉強が順調に進みました。それには、いくつかの理由がありました。第一に、韓国語を習い始めてすぐに、これは私にも習得できる言語だと直感したことでした。理由は簡単です。語順や発想が日本語とほとんど同じだからです。また、語彙の面で

も日本語と共通の漢語が多いこともやさしいと感じた理由です。英語をはじめ、フランス語、ドイツ語、中国語などを勉強して文法や発想が難しいと考えていましたが、韓国にはその負担がほとんどないように思われました。それは私だけではありません。韓国語がよくできる人に聞きますと、ほとんど例外なく、習い始めてすぐに簡単だと感じたと答えます。逆に、なかなか覚えられない人は最初から難しいとばかり感じているようです。外国語を習うには、プラス思考、楽観的思考が必要なようです。

第二に、熱心に勉強し始めてから一年ほどたって韓国語を教える機会に恵まれたことです。私が熱中しているのを見て、同僚の先生たちの何人かが関心を持ち、そんなに面白いなら教えてくれないかと頼まれました。「生まれたばかりの子犬は虎の恐ろしさを知らない」ということわざよろしく、大胆にも引き受けました。もちろん、私だけではできないことでしたが、幸い私の指導性の中に韓国人留学生がいたので、アルバイトとして手伝ってもらいました。学生は英語の先生 3 人、ドイツ語の先生 2 人、ロシア語の先生 1 人でした。教科書は自分が勉強したばかりのものでした。

この勉強会が、私自身が韓国語を勉強するのに大変役立ちました。考えても見てください。学生はみな外国語の先生です。次々と鋭い質問が来ます。自分ひとりで勉強するときとは違って、人に教えるときには確実に理解しておかな

ければなりません。わかっているつもりのことでもいざ説明しようとなると理解が曖昧であったことがわかってきます。この勉強会が2年ほど続いたのですが、そのおかげで、教えることは最も効果的な勉強法であることを実感しました。それは、韓国語の先生になってからも変わりません。ひょっとすると、皆さんが習ったことよりも私が勉強したことの方が多いかもしれません。皆さんもこの効果的な勉強法を活用してはどうでしょうか。一応のことを勉強したのですから、今度は家族や友だちに教えてみることを勧めます。その効果が大きいことは私が受け合います。

第3に、ある程度文法を理解してから、韓国語で書かれた専門書を読み始めたことです。私は音声学に特別な関心がありましたから、ソウル大学の許雄博士の韓国語音声学に関する本を取り寄せて読み始めました。音声学の基礎知識はありましたから、高度に専門的な部分を除けば、内容は容易に理解できました。専門書ですから漢字語が多く、そのほとんどが日本語と共通していますし、この本は漢字語のほとんどが漢字で表記されていたから、意味の理解は一層容易でした。漢字の読み方を勉強するのに大いに役立ちました。皆さんも、今後は専門分野の概説書をテキストにして勉強を続けることを勧めます。専門分野の理解にも役立ちますから一石二鳥です。ぜひ一度試してみてください。

第4に、語基文法に出会ったことです。用言の活用を説明するのに語基とい

う概念を使うのは、日本で開発された方法ですが、非常に無駄のないスマートな説明法です。韓国語と日本語の文法は酷似していますから、私達にとって韓国語の文法を習うことは非常に負担が少ないのですが、活用形だけは少々苦労します。授業中に何度も言ったように、極端な言い方をすれば、日本語話者にとって韓国語の文法学習は活用形の作り方と使い方を習うことだと言ってもいいくらいです。活用形はかなり複雑なのですが、語基という概念を用いると理解しやすいのです。そのことを私自身が韓国語を勉強していて実感しました。ですから、自分の教科書を作るときには迷うことなく語基文法を採用したのです。皆さんが、今後活用形の作り方で疑問に思うことがあったら、語基に関する部分だけでも丹念に読みなおしてみてください。

このようにして、私は楽しみながら韓国語の勉強をしていたのですが、次第に韓国語の重要性が認められるようになり、名古屋大学でも第 2 外国語として韓国語が開講されることになりました。そして、その教員の採用人事が始まったとき、私はいろいろと考えた末に応募することを決心しました。英語の教員であったものが韓国語の教員に鞍替えしようというのですから、尋常のことではありません。当然反対する人も数多くいました。

しかし、私がそのように決心したのにも、やはりいくつかの理由がありました。振り返ってみると、それらの理由の中で、決定的な役割を果たしたのは一

一枚の写真ではなかったかと思います。日帝時代、韓国では日本統治期をそのように言います、その当時の写真を集めたある写真集を見ていて、その中の一枚の写真に目が釘付けになりました。それは、日本のどこかの炭鉱の宿舎の板壁に釘か何かで引いて書いた落書きの写真でした。宿所と言ってもいわゆる「タコ部屋」と呼ばれた監獄のような監禁施設です。それはこのような落書きでした。（板書）簡単な文章ですから皆さんも意味はおわかりでしょう。

私はこの写真を見て強い衝撃を受けました。なぜなら、この落書きの主が思い浮かんだからです。それは、疲れ切った韓国の青年が、皆さんと同じくらいの、あるいはことによったらもっと若い青年が、泣きながら壁に釘をあてている姿でした。落書きの主が誰であったかはわかりません。しかし、彼が存在したことは紛れもない事実です。その写真はわたしに様々のことを考えさせました。そのうちの一つだけここで話ししたいと思います。

言葉には発信者がいます。話す者や書く者がいなければ言葉は成立しません。当然のことです。この当然のことの重要さを、あの一枚の写真が私に改めて考えさせたのです。言葉は意思疎通の手段、伝達のための手段であると言います。言葉によって伝えられるのは情報や知識だけではありません。人間の思いや願い、喜びや悲しみも言葉に込めて伝えられます。場合によっては人格が言葉を通じて伝えられるということもできます。そのようなことを、私はそれまで長

年様々な外国語を習いながら、一度も感じたことがなかったのです。あの写真は私にそのことを気付かせてくれたのです。

授業中に、私が何度も皆さんに、試験のために勉強するな、そんなことで外国語学習の面白さを損なうな、と言ったことを覚えていますか。外国語学習の面白さとは人と人との接触、交渉、交感の面白さです。それ以外の何物でもありません。外国語は単なる知識ではありません。知っているだけで使わなければ何の意味もありません。優れた発信者になり優れた受信者にならなければなりません。優れた発信者、受信者というのは、韓国語が上手だということではありません。上手であるのが望ましいのはもちろんですが、そうでなくても可能です。

これも授業中に言ったと思いますが、「안녕하세요」「감사합니다」「미안합니다」を私は三点セットと呼んでいます。この三点セットを覚えたら、韓国へ行って使ってみるべきです。実際の場面で使ってみるべきです。そして、相手の反応をよく観察してください。相手から好意的な反応を引き出せたらあなたは優れた発信者であり、受信者です。言葉による心と心の触れ合いに関心を持ち敏感になることが重要なことです。皆さんは三点セットよりはるかに多くのことを知っています。知識が不十分だと否定的に考えるのではなく、今できることで心の触れ合いを試みてください。外国語を使うことの楽しさが実感できる

と思います。

私の後輩である皆さんに敢えて苦言を呈しますが、名古屋大学の学生は知識こそ豊富ですが、知識を実際の行動で活用しようという意欲に欠けます。外国語に関する限りそれは大きな弱点です。試験のためには勉強するが、合格すればそれまでという学生が多いことは、まことに惜しいことだと外国語教師として、先輩として思わざるを得ません。外国語は、真摯に向き合えば、皆さんの人格形成に大きな影響を与える可能性があります。試験なんかのためにその可能性をつぶすようなことにならないようにしてください。

皆さんにお話ししたいことは他にもたくさんありますが、最後の授業であるという個人的な理由で、皆さんをいたずらに疲れさせることはできません。今日この場で私の話を聞いてくださった皆さんと、ここにはいませんがこれまで私に韓国語を教える機会を与えてくれた数多くの学生のみなさん、そして、私を支えてくださった、同僚の皆さんや韓国語の先生方に感謝申し上げて、私のお別れのごあいさつを終えることにいたします。

ありがとうございました。